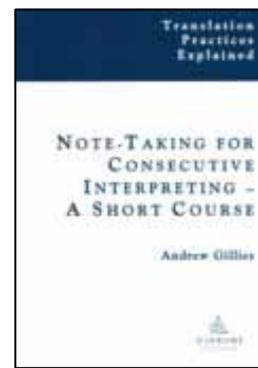


書評

Note-Taking for Consecutive Interpreting – A Short Course

著者 Andrew Gillies
出版社 St. Jerome Publishing
出版年 2005 年
頁数 239
ISBN 1-900650-82-7 (ペーパーバック)



この本は、Translation Practices Explained (Series Editor: Dorothy Kelly, ISSN 1470-966X) のシリーズ 8 冊目にあたる。会議通訳者をめざす人たちの実践的なガイドとなるように、大学、専門学校、もしくは自習する学生のための本である。

著者は AIIC (国際会議通訳者協会) の会員であり、主として欧州連合の機関で仕事をするフリーランス通訳者である。また Jagiellonian University および欧州議会と協力して、ポーランドのクラクフで定期的に会議通訳者のためのワークショップを開催しており、通訳訓練にも豊富な経験を持つ。A 言語が英語、C 言語がフランス語、ドイツ語、ポーランド語であり、フランスに在住する。

本の構成は第 1 部、2 部、3 部に分かれ、次のようになっている。まず第 1 部では序章で逐次通訳の要領をまとめてあり、通訳論の最初の授業などで役立つ。授業で使う場合のカリキュラムの提案もある。続いて第 1 章：スピーチ分析 (Speech Analysis)、第 2 章：アイディアの認識と分割 (Recognizing and Splitting Ideas) 第 3 章：ノートの開始 (The Beginning of Notes)、第 4 章：リンク (Links)、第 5 章：意味価の垂直性と階層 (Verticality and Hierarchies of Values)、第 6 章：シンボル (Symbols)、第 7 章：記憶想起の促進 (Memory Prompts)、第 8 章：何をノートにとるか (What to Note) と続く。第 2 部は処理ユニットとしての節 (Clauses) の扱い、省略の規則 (Rules of Abbreviation)、動詞 (Verbs) 特に動詞の時制の処理 など、ノートをとるときのさまざまな実践的なアドバイスが満載されている。最後の第 3 部では、実際のスピーチのテキストを掲載し、あわせてどこからノートテイク練習用の素材を見つけることができるか (Where to Find Practice Material) を紹介している。

この本は基本的にはすでに逐次通訳になじみのある人を念頭においているが、それほど経験がない人の自習書としても使えるように、段階的にノートテイクの方法について説明している。全体的に記述は印欧語を念頭においているが、この本で紹介されているノートテイクの方法は今までにさまざまな会議通訳者が実践した智恵を集めたものを体系的に説明し、著者が通訳教育・訓練にあたった立場から必要な項目を網羅し、練習を積めるようにしたものである。

序章で示されているノートテキングについての著者の考えに共感するところが多い。スピーチとはアイディアのグループを特定の順序で並べたものとした上で、ノートとは元発話 (source speech) を通訳者が分析した結果を視覚的に表したものである。通訳者は口頭で話す能力が問われる仕事であるが、スピーチの構造を理解し、適切なノートを作成できるようにするためには、まず音声を使わずに母語のテキスト

外国語のテキストの順番に構造分析をする練習をすべきだと説く。通訳者に必要な能力である論理的にロジックを追う訓練を積むには、音声聴取の負荷をかけずにテキスト分析の方法だけをまず身につけるのが有効であるからだ。実践を通じて身につける (learning by doing) という立場から、「聞いたことは忘れがちであるが、見たことは記憶に残り、自ら行動したことは理解が深まるものである」という中国のことわざを引用しているのにも共感する。

ノートテキングはそれぞれの通訳者が自分で体得するしかない、教えるのがむずかしいとする意見がある一方で、通訳学習者の中には、通訳能力がつかないのはノートテキング能力が足りないからだ、とノートテキング能力があたかも万能薬であるかのように考えている人もいる。実際には、この本が示しているように、スピーチの構成はどうなっているのかを地道に研究することからはじめて、自分が通訳者としてたずさわる言語においてどのような構造のスピーチが多いのかを把握し、さらにこの本で豊富に例示されているノートの実例および各種記号類を参考にして、自分なりにやりやすいやり方を工夫しながら練習を重ねるのがよいやり方であろう。著者が勧めるように、まず音声を使わずにテキストをみてスピーチを分析し、ノートを作ってみることから始めて、次に音声を使って練習するというのはいい方法と思われる。

ノートテキングを起点言語、目標言語、あるいは母国語もしくは外国語のどちらでとるのがいいか、という点もよく議論になるが、この点についての著者の見解ははっきりしている。自分のやりやすい方法でとればいいが、基本的には母国語である場合がほとんどであるとしている。この本のアドバイスを入れるとすると、日本語母語話者の私たちは日本語をベースにした書記法を工夫せねばならないが、ここで著者が示している各種記号類を参考に、日本語ならではの仮名漢字をうまく取り入れたノートテキングシステムを自分なりに作って行く訓練を、自習あるいは教室で取り入れていくのも有効であると思われる。言うまでもなく、通訳とは内容を理解して意味を伝えることである。本書は、それを最も効率的に行うためのノートテキングのシステムを、著者自身や他の通訳者の経験に基づいて体系的に提示したものであり、学生にも、通訳教育・訓練を行う立場の人にもお勧めしたい本である。

[評者] 鶴田知佳子(TSURUTA Chikako)東京外国語大学教授。日本通訳学会理事。AIIC(国際会議通訳者協会)会員。コロンビア大学経営学大学院卒業。経営学修士(MBA)。NHK-BS、CNN 放送通訳者、会議通訳者。実践に役立つ通訳教育法に関心を持つ。